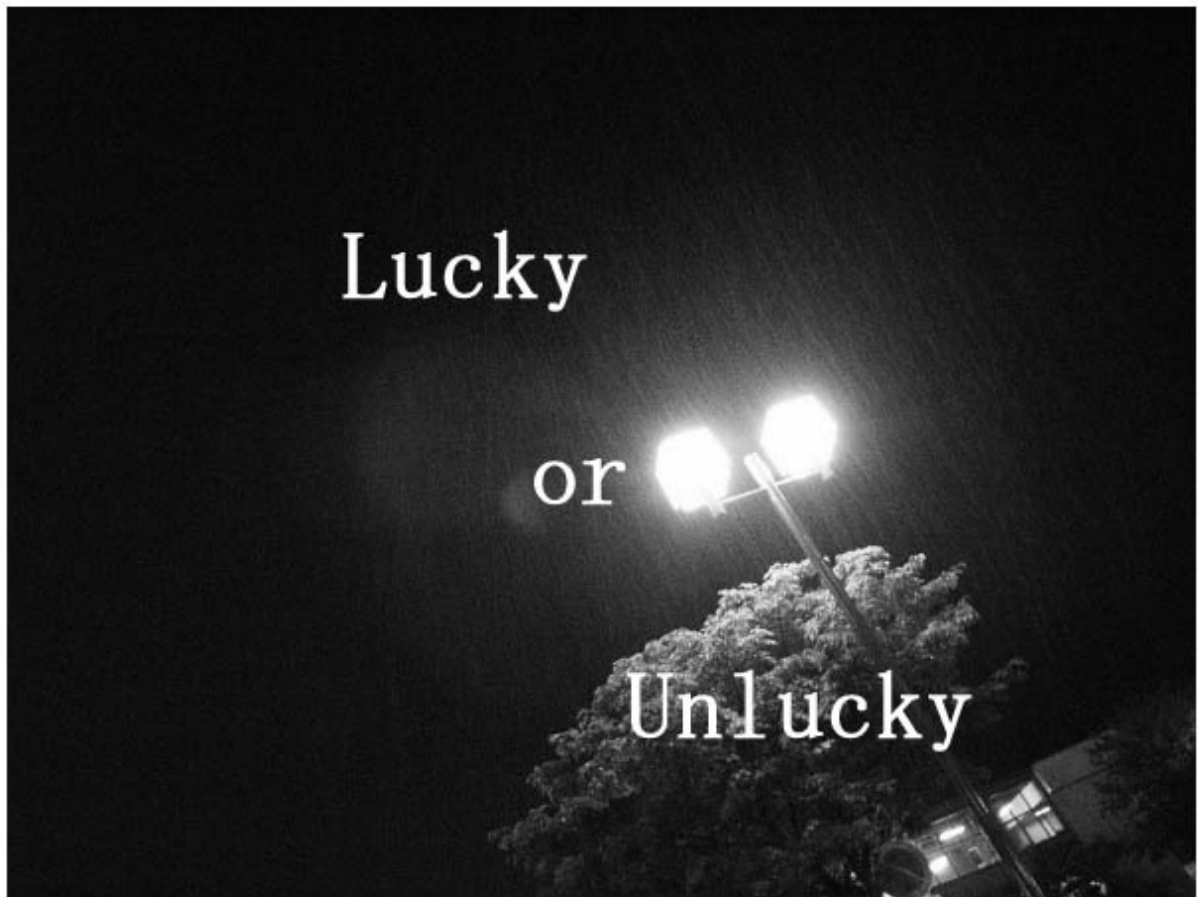


# 短編 4



story by aono

photo by hiros

客席フロアーの照明が徐々に暗くなる。隅にある小さなステージは、既にバンドマンのシルエットが見えるだけになった。交代の時間だ。

ピアノがワルツのイントロを演奏し始めた。ドラム担当のノブがそれに合わせてスネアをブラッシュで撫でるように叩く。左足はハイハットを小さく鳴らす。

『嘘は罪』

暗がりの中を、コンボのメンバーは楽器を手に目立たないようにステージを降りた。シンガーのケイがピアノからメロディーを引き取って歌い始めた。スポットライトがケイにあたる。

—愛してるという言葉は本気で言ってね、嘘は罪よ—

右手でマイクを持ちながら、ケイは左手で拳を作って腰にあてる。ノブへの合図だ。

『これからあいてる？』

ノブはシンバルを軽くたたいて返事をする。

『今夜は先約がある』

色白のケイにはショッキングピンクのドレスがよく似合う。もう少し若ければ、付き合ってもいいんだが、眼尻に皺が目立つし、体の線も崩れ始めている。二十三歳の俺が連れて歩くにはちょっとね、とノブは心の中でせせら笑った。

ゆっくりとしたワルツに乗って、客は体や顔をぴったりと寄せてダンスを始めた。ステージを見ている者などいない。ノブは音を立てないように静かにドラムから離れた。見慣れた光景で何も感じないが、たまにフロアタムをドンと鳴らしたい衝動に駆られる。客の驚いた顔を見たくなるのだ。もちろん、そんな事をしたらクビになるのは間違いない。

十一月にクラブに来る客は多くない。ジャズの生演奏を売り物にしている横浜のこのクラブ『エバンス』も、週末にもかかわらず客の入りは六割ほどしかなかった。クリスマスシーズンの始まる十二月までこんなもんだろう、とノブは客席を横目で眺めながら楽屋へ戻った。客の心配はマスターの仕事だ。俺の知ったことではないが、給料を削られるのは困る。

ドラムスティックを指先でくるくると回しながら、いつも楽屋に置いてあるバーボンをグラスにトゥーフインガーほど入れた。

一気に喉に流し込む。

液体が喉を焼くような感覚がたまらない。

楽屋の隅で帳簿を眺めているマスターが顔をあげた。

「ノブ、無茶飲みするなよ」

「大丈夫ですよ。それより、マスター、車を借りてもいいですか」

「なんだい、これからデートか」

「六本木でアカネが待ってるんですよ。東名を使えば三、四十分ほどで行けますから」

「アカネちゃんか。ノブ好みの美人だしスタイルも日本人離れしている。歌手としては使い物にならないが。しかし何でお前なんかと付き合ってるのかね」マスターはやれやれというように頭を左右に振った。

「車は貸すが、飲みすぎるなよ。事故でも起こされたらたまらんからな」

ノブはにやっと笑った。

「俺の腕は知ってるでしょう。これでもA級ライセンスを持ってるんですから」

「分かった、分かった。とにかく気をつけるよ」

マスターは引き出しからキーを出すと、ノブに投げてよこした。片手で器用にキーを受け取ると、バーボンをストレートでもう一杯飲みほす。

ドラムスティックをしまい、駐車場へ急いだ。建物の裏手にある名ばかりの駐車場にマスターのムスタングは置いてあった。白の車体が雨で光っている。

「本降りになりゃなきゃいいが」ノブは黒い空を見上げた。

赤や黄色のネオンサインが派手な表と違って、クラブの裏側は質素だ。暗い駐車場を肩をすぼめるようにして車まで走る。ハンカチで服についた水滴を拭い、濃い紫色のジャケットを脱ぐと助手席に放り投げ、車を急発進させた。

横浜インターから東名高速道路に入ると、ノブはスピードを百五十キロまで上げた。ヘッドライトの光を反射して雨が銀色に輝いている。雨は強くなる一方だ。水滴が風に流されて車のウィンドウを這うように上へ上へと流れていく。東京インターまで距離で約二十キロ、十分もかからない。車輪は、まるで噴水のように飛沫をはね上げている。

料金所のグリーンの看板が視界に入った。左側のゲートはどれも数台の車が並んでいる。空いているゲートへとノブは右に急ハンドルを切った。雨でスリップした車体は左へ何回か旋回した後、横に九十度傾き、地面とタイヤの擦れる嫌な音を立てて、横転したまま片側の車輪だけで走行、コンクリートの側壁に激突した。

けたたましいパトカーのサイレンの音が聞こえると同時に、慌しく点滅している赤いランプの光がノブの目に入った。炎上は免れたらしいが、車体は完全に反転しているらしい。ノブの体は逆さになっていた。粉々に割れたフロントガラスの向こう側にきな臭い匂いのする白煙が上がっている。それも降りしきる雨で、シューッと消えていった。体を動かそうとすると、全身に激痛が走った。車内に流れ込む雨水で体が冷たい。

「おい、動いているぞ。まだ生きている。救急車を呼んでくれ」

車の中を覗き込んだ警官の一人が、相棒に呆れたように言った。

「しかしよくまあ、死ななかつたものだ」

「これのおかげで命拾いしたんだろう」合羽を着た警官は同情のひとかけらもない声で、車内に取り付けられていたロールバーを叩いた。

「若いくせにこんな車に乗っているからだ」

苦々しく吐き出されたその言葉は、すでに痛みで気を失いかけていたノブの耳にかすかに届いた。

\* \* \* \*

真夏の強い日差しが、都会のアスファルトを溶かしている。

どこかにつけて客待ちをしようと、杉山伸治は新宿のホテルへと車を移動させた。バブルがはじけて十年以上が経ち、五十歳でタクシーの運転手になってから、そろそろ二年が過ぎようとしている。月々の収入は二十万を少し欠ける。三十万稼げる月は一年にあるかないかだ。

家賃を払うと残りは少なく、同居中の久恵とそのことで争いが絶えない。文句があるなら出て行けと言いたいところだが、久恵の収入に頼っている部分もあって、実際に出て行かれたら困るのは自分だと分かっている。ホテルのタクシー乗り場には数台の車が待機していた。こんなに暑い日は、ワンメーターの客も多い。あまり期待はできないと思いつつも、最後尾に車をつけた。ホテルから出てきた客は殆どがタクシーに乗り込む。ホテルからは新宿駅まで歩いて十五分ほど。灼熱の地獄を経験するつもりはないのだろう。

伸治の車が先頭になったとき、シルバーグレーのベンツがエントランス近くに止まった。ドアボーイが近づいて、窓越しに何かを話している。ベージュのサマースーツを着た男がホテルから出てきたのは、そのときだった。いい客かもしれないと思った伸治は、その男がタクシー乗り場に歩いてくるのを見つめていた。ベンツのドアが急に開いて、ポロシャツ姿の男が降りると、無言でスーツの男に向かって拳銃を発射した。聞きなれない爆発音が伸治の耳を痺れさせた。撃たれた男は、腕を前方に伸ばし、すがるような目で伸治を見つめると、スローモーション映画のように膝から崩れ落ちた。

伸治は茫然とその光景を眺めていた。人が殺されるのを見たのは生まれて初めてだ。体も頭も硬直している。

拳銃を撃った男は、悠々とベンツに戻り車を発進させた。ドアボーイが弾かれたようにホテルの中へ駆け戻った。

\* \* \* \*

虫くいのような模様のパネルが貼ってある病室の天井を見上げながら、ノブは自分の音楽人生の終わりを感じていた。事故で右手の腱を切ったのはドラマーとしては致命傷だ。復帰はできないだろう。肋骨は何本か折れ、両手両足は複雑骨折をしていたものの、幸い傷は内臓に達していない。

「骨折だけで済んだのだから、運がよかったですよ」と医者と言った。

だが、ノブは運が悪かったと思う。

「これからどうすればいい？」 ノブは途方にくれていた。

あの日、六本木で落ち合うはずだったアカネは見舞いにも来ない。既に別の男に鞍替えをしたのだろう。連れ歩くには最高の女だった。すれ違った時、振り返らない男はいない。たとえ頭の中は空っぽだったとしても、何の問題もなかった。

横浜のジャズクラブ『エバンス』でステージを終え、バーボンを喉に流し込むと、アカネの待つ六本木のバーへと車を飛ばした。そのあげくがこのざまだ。

保険金は出るのだろうか？

病院へ一度だけ顔を見せたマスターはそのことには触れなかった。

車の代金をマスターに弁済しなければならないだろう。仕事も当分ないとなると、先行きは真っ暗だ。自業自得という言葉がふと浮かび、ノブは苦笑した。

シンガーのケイは時々顔を見せてはノブの世話を焼く。家族のいないノブにとってはありがたいことだったが、昼間見るケイの顔はノブの想像以上だった。アカネだったらなあ、ということもあるが、考えても仕方ない。

俺の人生は大学を退学になったあの日から狂いっぱなしだ。苦い思いと共に、ノブの脳裏に過去の事件が蘇った。

渋る両親を説き伏せて、やっと入った三流大学の一年生の時だった。体育会系のクラブに所属し他校との交流、親睦を兼ねて盛り場へ繰り出した。総勢十数名。傍若無人に振舞う学生に、その店にいたチンピラやくざが目をつけた。事の発端は何だったか分からないが、大乱闘となり、警察の介入するところとなった。

チンピラに怪我をさせたのは、ほんのはずみだった。ノブは身を守るのに精一杯で、他のことは覚えていない。相手がやくざという事もあって、恐怖が先立ち、無我夢中だった。人を傷つけた記憶はないが、相手は全治三ヶ月の傷を負ったという。

警官に腕をつかまれ警察のブタ箱へ投げ入れられた。興奮状態にあったノブは、留置所で大声で悪態をついたというが、本人の記憶にはない。

退学になったのは相手に怪我をさせたノブひとりだった。他のものは停学処分済み、籍は残っていた。

相手がやくざだったからか、裏で何かが動いたのか知る由もないが、起訴されることはなかった。しかし学校へ戻ることはできない。

「なぜ自分一人が？」 ノブの怒りは学校と部の先輩へと向けられた。いくら憤慨しようと、理不尽だと叫ぼうと、なす術はない。両親にはノブを支える財力も気力もなかった。

「これからどうすればいい？」

学校を追い出され、親に見放され、ひとりで生きていかななくてはならなかった。それはノブが十八歳の夏だった。

昼間は皿洗いをして働き、夜は道路工事に従事した。無我夢中で働くノブの傍らを、時代が通り過ぎていった。高度成長も、いざなぎ景気も無縁だ。繁華街に出iriする若者は、ノブとは別の世界の住人だと自分に納得させる。仕事でも、彼らを見ないようにするのが精一杯だった。

誰とも親しくならず、誰にも世話にならずアルバイトをして食いつないで三年経った。

好きだったジャズをただで聴けるという理由で、横浜のジャズクラブでボーイとして働くようになったのは、二十一歳のときだった。ドラムの魅力に取りつかれ、毎日ドラムスティックで机を叩いて練習する日が続いた。

そんな努力が実を結んで専属ドラマーとしてやっと独り立ちできた今、又、運がノブから逃げて行った。

\* \* \* \*

事件の目撃者として、伸治は警察に事情を聞かれるはめになった。

職場や自宅に、ふいに刑事が現れる。警察へ呼ばれることもある。一日中警察に留め置かれて、日当は数千円。やってられないと思うが警察は伸治の事情など頓着してくれない。水揚げが減れば、当然収入も減る。そのことで、久恵から嫌味を聞く回数が増えてきた。

だが、何よりも伸治を悩ませたのは、撃たれた男のすぎるような目だった。昼も夜も、あの目が脳裏から離れない。暴力団がらみと伸治が思っていた事件は、金融業者間のもつれから起きたと警察で知らされた。白昼拳銃で人が殺されるなんて、日本もアメリカ並みになったものだ。客の一人がネットで簡単に拳銃が手に入ると言っていたのを思い出した。必要になったら、ネットでも覗いてみるか。久恵との同棲もそろそろ飽きてきた。もともとあっちが押し掛けてきたのだ。

\* \* \* \*

六ヶ月ほど入院して、ノブは職場に復帰した。ドラムはもう叩けないが、水商売の素質と、音楽を聴く耳の良さを買われ、フロアマネージャーの仕事を与えられた。しかし毎月の給料から一定額が車の弁済金として天引きされる。クビにされなかったのがせめてもの幸いだ。運はまだ残っているかもしれない。

ノブはマネージャーとして頭角を現し、抜群の記憶力と、気配りで、常連客が増えていった。店も以前よりかなり繁盛している。そろそろ支店を出しても良い頃合いだ。ノブがマネージャーになってから数年が過ぎていた。車の弁償もすでに終わっている。

「マスター、不動産屋が物件持ってきてますが、見に行きますか？ うちの支店を出すには良い場所ですよ」

「そうだな、一度見てくるか」

「すぐ車をまわします」

サンダーバードを入り口に横付けし、マスターを乗せると車を発進させた。

国道一号線を東に進む。平日の午後二時頃とあって、道路は思いのほかすいていた。

見通しの良い直線道路を気持ちよく走る。前方の信号が青に変わった。進行方向に見える範囲の信号はすべて青だった。ノブはスピードを少しあげて交差点を通り過ぎようとしたその時、側面から強い衝撃を受けた。車はスピンを繰り返して、対向車線まではみ出して止まった。

「マスター！ 大丈夫ですか？」痛みをこらえながら後部座席に首を向けた。

あの時のように遠くから救急車のサイレンが聞こえる。ノブは額から流れ落ちる血で、眼を開けていられない。もう一度「マスター！」と叫んだが、返事はなかった。

信号無視の車が原因でマスターは死んだ。遺族の意向で雇われ社長となったノブは必死に働いた。店を大きくすることがマスターへの恩返しだと信じて疑わなかった。

支店も拡大し、いつのまにかよりを戻したアカネと結婚。何年間かすべてが順調だった。

だが、年末のある日、通帳と帳簿を持って経理課長がノブのもとにやってきた。

「社長、実は……」

「どうした？」

「不渡りを出しそうなんです。給料分も足りません」

「不渡り？」

給料が払えない？ 金がないのか？

そんな筈はないだろうとノブは課長の顔を見た。

「言いにくいんですけど」課長は口ごもる。どうやらノブの妻が金を引き出して情人に渡しているらしい。いくら繁盛していても右から左へと金が渡っているのは通帳に残っているわけがない。昨日帳簿を調べてわかったと言う。

——うすうす気がついていたんですが、と課長は申し訳なさそうに頭を下げた。

——社長には言いづらくて……。

ノブは店も妻も失った。

混乱する気持ちを抱え、ノブはクスリに手を出した。

\* \* \* \*

久恵との生活もそろそろ潮時だと、伸治は考え始めた。廃人になりそうだった自分に手を差し伸べてくれたのは久恵だった。クスリと縁が切れたのも、久恵の献身的な介護によるものだ。だが、こんなつまらない人生を望んでいたのではない。

人生の引き際かもしれない。ノブと呼ばれていた若い頃から自分には運がない。あの撃たれた男の目が、お前もそろそろだぞと言っているように思えた。拳銃もネットで手に入れた。用意はできている。

休みの日に、伸治は久恵をドライブに誘った。

「たまには箱根へでも行ってみないか」

朝から雨模様のその日、天気予報は台風の接近を伝えていた。そんなことには頓着なく、久恵は子供のようにはしゃいでいる。

「珍しいわね。デートなんて久しぶりじゃないの」

しかし伸治は久恵に別れ話を切り出すつもりだ。

「お前も若いころから知っているように、俺は実に不運な男だ」

東名高速を西に下りながら、助手席の久恵に伸治は自嘲を込めて説明した。

「そうは思わないわ」

久恵は、前方を向いたまま答えた。

「そうは思わない？　じゃあ、どう思う？　幸運とは言えんだろう」

「幸運よ、二回も自動車事故で死にそうになったのに、こうやって生きてるし、クスリをやっても足を洗えたし、幸運でなくて何なの？」

「本当にそう思うか？」

「もちろん」久恵は明るく答えた。

「あなたがノブと呼ばれていたころからずっとそばにいるんですもの、良く分かってるわ」

『もう一度、運を試してみる価値があるかもしれない』

伸治は考えた。『同居したときお互いが受取人の生命保険がかけてある。事故を起こしても、どちらかが助かるかもしれない。何回も失っている命だ。失敗したってもともとだ。俺に運があるか、久恵に運があるか、二人とも運がないか、試してみても悪くはない。わざわざ拳銃なんか使うこともない』

伸治は久恵に向かって笑いかけた。

「おまえはほんとに素晴らしい考え方をする」

そう言うと、アクセルを目いっぱい踏み込み、CDのスイッチを入れた。

—愛してるという言葉は本気で言ってね、嘘は罪よ—

パティーン・ページの少し掠れた声が流れ出した。

本名の一文字を取ったケイという名のシンガーとして久恵がよくバンド交代の時に歌っていた曲だった。